

島原半島ジオパーク再認定現地審査報告書（公開版）

現地審査員：宮原育子（宮城学院女子大学）・柚洞一央（徳山大学）・石川 徹（霧島 GP）

審査実施日：2016年11月3日（木）～6日（日）

主な対応者（所属）：

古川隆三郎（島原半島ジオパーク協議会会長，島原市長）、金澤秀三郎（島原半島ジオパーク協議会副会長，雲仙市長）、松本政博（島原半島ジオパーク協議会副会長，南島原市長）、平山慎一、大野希一、鯨津一哉、小川卓巳、城谷敦史（島原半島ジオパーク協議会事務局）、馬越孝道（長崎大学環境科学部教授）、光武久修（国土交通省雲仙復興事務所）、中山良太（環境省雲仙自然保護官事務所）、佐藤隆幸（長崎県島原振興局総務課）、山本麻衣（長崎県環境部自然環境課）、吉田修三（島原市しまばら観光おもてなし課）、前田祥平（雲仙市産業部観光物産課）、梶原和隆（南島原市商工観光課）、林田真明（一般社団法人島原半島観光連盟 事務局長）、長井大輔（公益財団法人雲仙岳災害記念財団）、相良淳郎（小浜温泉観光協会）、中島順一（一般財団法人自然公園財団雲仙支部）、大町由紀（一般財団法人自然公園財団雲仙支部，認定ジオガイド）、大向あぐり（雲仙諏訪の池ビジターセンター）、佐々木毅（榊文旦堂）、水田喜代治（ファミリーマート島原城下町店）、慶田久美子（湧水庭園四明荘）、宮崎彰（榊梅桜亭）、福田葉子（やまびこ友の会）、佐々木雅久（雲仙ガイド“さるふぁ”）、金子加代子（有明童話の会くすのき）、北田貴子（榊北田物産）、松田久美（松田屋老舗）、吉岡誠一、酒井繁雄、伯川光子、荒木厚美、永田ゆき子、谷口喜八郎、高田光則、中村和美、吉田明美、石見 剛（認定ジオガイド）

見学地点：

雲仙岳災害記念館、国土交通省砂防指定地、雲仙地獄、諏訪の池、早崎海岸、龍石海岸ほか

現地審査のまとめ：

1) ジオサイトと保全

ジオパークの看板は、「ジオパーク」や地名（たとえば「龍石海岸」など）を明記しただけものが目立ち、地域全体や各サイトのメッセージが来訪者に伝わりにくい。ジオパークという言葉で宣伝するのではなく、具体的にどのような学びや楽しみが可能な場所なのかを、誰にでも伝わる直感的なキャッチフレーズを用いた看板に修正することが望ましい。また、火山学や地質学などの専門用語の多用や安易な「ジオ〇〇」という言葉が目立つ。一般消費者の目線に立って、例えば玄武岩をお菓子に取り入れるならば玄武岩とはどんな石か、それが地域にあることにどんな意味や価値があるのかを明確にしてほしい。また、ジオ〇〇と名づけるならば地形・地質とのつながりが誰にでも分かるように示してほしい。

ジオパークの考え方は年々進化している一方で、島原半島ジオパークはその変化について来られていない印象を受ける。火山地質公園ではなく、「大地の公園」になるよう、見せ方の工夫を精力的に行ってほしい。例えば、岩や湧水をいきなり説明するのではなく、農地における栽培農産物の違いから、地質の違いを説明したり、水神として人々が湧水を大事にしてきたという話からなぜここに湧水があるのかを説明したりするなど、人の暮らしから大地の

成り立ちを説明する工夫をもっとしてほしい。

2) 教育・研究活動

島原半島内の小・中学校、高等学校、長崎大学において積極的なジオパーク教育が行われており、その成果発表の場を設け地域住民と共有する場を作り出す努力もなされている。このような優れた取り組みを継続的に進めて、そこで育った人たちが今度は地域研究や教育を推進する役割を担っていきけるような仕組み作りを目指してほしい。

雲仙岳災害記念館の展示改修に際して、その名称を「島原半島ユネスコ世界ジオパークセンター」のような、ジオパークの拠点施設であることが誰でも分かるようなものに変更してほしい。また、現在の有料ゾーンは平成噴火に特化した内容になっており、ジオパークの拠点施設としてはバランスを欠いている。今後は、平成噴火も含めた島原半島全体のストーリーを理解できるよう、有料ゾーンと無料ゾーンの住み分けも工夫しながら展示のあり方を見直してほしい。その際には、関係機関をはじめ、ジオガイドや被災地域の住民、高校生などの住民の意見も交えて議論し、あるべき施設の展示を模索してほしい。また、展示は一方的なものだけでなく、地域住民とジオパークを見に来た観光客とのコミュニケーションの場にすることを目指してもらいたい。

3) 管理組織・運営体制

協議会事務局と地域社会の間に距離あるいは壁があるように感じられる。事務局は仕事や情報を抱え込み過ぎずに地域に寄り添いながらともに悩んでほしい。その事務局の今後の体制については、職員の異動問題にこだわらず抜本的な改善を要求したい。例えば、3市のジオパークに対する考え方や意識は異なる。であれば、各市役所にジオパーク対応組織（または、市役所内のプロジェクトチーム等）を設置し、各市がジオパークを動かし、全体の取りまとめ役として協議会事務局があってもよい。現状に合った、より実践的な運営体制の構築が求められる。いかに、地域住民とともに悩めるか、行動できるかを模索してほしい。

事務局専門員が地域の様々な取り組みに関わる中で優れた成果を残しており、その結果として多くの地域住民や関係者から大きな信頼を集めている。その一方で、専門員ひとりに多くを頼りすぎている印象を受ける。専門員がいなければ成り立たない事業も目立つなど、地域の持続可能性に疑問符がつく。ジオパークの関係者は自分たちも島原半島ジオパークを支えていくという強い覚悟を持ってほしい。また、専門員に対する地域からのサポートも必要である。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

ジオパークサポーター制度の導入など、ジオパークの輪を地域内に広げる活動が少しずつではあるが着実に進んでおり、中でも女性の活躍が著しいことは評価できる。一方で、ジオパーク関係者の中で、「ジオパークとは何か?」「ジオパークを使って地域をどうしていきたいか?」といった根本的な認識が地域全体で共有できていない。とくに「持続可能な開発」という基本的概念が地域内で理解されていないように見える。ジオパークの認定基準「ジオパークを目指す地域は、持続可能な地域社会の実現のために、ジオパークとして、その地域にあったやり方で住民、行政、研究者などの関係者が、ともに考え続けているか。また、そのために、

これまでのやり方を変える覚悟があるか」を地域全体で再度確認してほしい。そして、組織や人間の横のつながりを深めるべく、地域全体で地域の将来を考える雰囲気地域住民に寄り添った形で整えてほしい。

ジオガイドによる気持ちのこもった説明やパネルの工夫などは評価できるが、それでもまだジオストーリーを十分に語れていない。JGN 霧島大会のガイド分科会で作られた「理想のガイド像」などを有効に活用して、早く次の段階に進んでほしい。ガイド内容は台本の丸暗記ではなく、もっと地域住民の個性がにじみ出るようなものを目指してほしい。また、前回の再審査の指摘事項でもあったように、自立したガイド団体を組織してほしい。そのためには、ガイド同士の意思疎通を深め、助け合える雰囲気作りから始めることが重要である。また、他地域のジオガイド組織の取り組み等も参考にすることも重要だろう。熱意のあるガイドもいるので、事務局はそのバックアップをしてほしい。

観光に対する取り組みが弱い。とくに個人客や家族連れに対する導線の設定ができていない。ジオパークを楽しみたいという一般消費者が、具体的にどこに行ったら情報が手に入られるのか、どこでどのような学びや楽しみが体験できるのかが分からない。ジオパークを楽しみたくても楽しめない「ジオパーク難民」を減らす努力がほしい。

5) 国際対応

濟州島ユネスコ世界ジオパークおよび香港ユネスコ世界ジオパークとの姉妹提携、人的交流はたいへん優れた活動である。また、拠点施設において日本だけでなく世界のジオパークを紹介していることも評価できる。その一方で、例えば早崎海岸のオルレコースなどは濟州島との地質学的つながりを感じられるできるサイトであるが、韓国人の来訪も多いにも関わらずその紹介が弱い。交流先のジオパークの特徴や島原半島との違い・共通点等をもっと深く理解して、実質的な連携を深めるべくお互いが幸福になれるようなアイデアを模索してほしい。

6) 防災・安全

雲仙岳の噴火の際に発生した火砕流や土石流によって埋められた水無川流域は、砂防指定地として国土交通省によって管理・整備されており、今もなお発生する土石流への対策がとられている。また、砂防指定地の教育やジオツーリズムへの活用が進み、地域住民への防災意識の向上がはかられている。

7) 結論

地域のジオサイトを活用した教育研究活動が盛んに行われており、その成果も地域へ還元されている。香港・濟州島とのジオパーク姉妹提携により積極的な国際交流が展開されている。また、サポーター制度の導入等によりジオパークの輪が地域に広がっている。

その一方で、地域全体での情報共有が不足しており、ジオパークを使ってこの地域をどうしていきたいのかが関係者の中でも不明確である。また、前回の再審査における指摘事項に何らかの対応はなされているものの、事務局体制改革への未着手やガイド団体が組織化できていない等、根本的な解決になっていないものも見受けられる。取り組み全体を通じて、専門員ひと

りへの依存度が高いことも持続可能性の点で問題である。以上のことから、条件付きで日本ジオパークとして再認定とする。

以上